

シャルル＝ルイ・フィリップ『クロキニョル』における

「時間意識」について

東海 麻衣子

0. はじめに

サルトルが提唱したように、近代フランス文学がブルジョワジーの文学であるという前提¹⁾を受け入れるとするならば、その系譜の埒外にあるシャルル＝ルイ・フィリップ(1874-1909)の文学が異質であるのは、当然のことと言えるのかもしれない。

小さな田舎町の木靴屋に生まれ、奨学金を得てリセで学んだ後、パリの市役所に務めながら小説を書いたフィリップは、ブルジョワの軽蔑した世俗的なものへの愛着を主題として憚らなかつた。ブルジョワが優雅に観念をもてあそんでいる隣で、彼は、職業や労働、単調な日常生活のうちに宿る生の哀しみや歓びを描いていたのである。

本稿では、ブルジョワによって語られ、消費されてきた文学のただなかで、ブルジョワではない作家が発した言説がいかに異質であったかという点について考えてみたい。その一つの指標として選ぶのは、「時間意識」をめぐる言説である。

1. 『クロキニョル』の解説とあらすじ

フィリップはそもそも、時間への関心の強い作家である。長編、中編、短編、そして、手紙にも、何時何分という時刻の記述が溢れ、時間に敏感な気質がうかがえる。そして、作品の多くにおいて、非常に多様な「時」「時間」の描写を残している²⁾。我々は、フィリップが残した数ある「時」「時間」「時間意識」の描写のうち、彼にとって最も切実な、中心問題となるべき「人間的時間」が認められるテキストとして、『クロキニョル』を取り上げる。

『クロキニョル』は、1904年春から1906年夏にかけて執筆され、1906年12月に出版された長編小説である。『ペルドリ爺さん』『マリー・ドナディユ』に引き続き、ゴンクール賞を僅差で取り逃すものの、文壇から高い評価を受けた³⁾。

ではまず、全体のあらすじと登場人物の関係を確認しておこう。

第一章。舞台はパリの役所である。そこには、「役所」« l'Administration »を具現

化したようなポーラ、陽気で快樂主義者のクロキニョル、真面目で誰からも尊敬されているフェリシアン、物静かで内気なクロードという四人の登場人物が働いている。ちなみに、主人公クロキニョルには、アリステュード・ビュフィエールという本名があるのだが、毎朝娼館に立ち寄り、「croquignole」と呼ばれる商品見本の菓子を娼婦たちに振る舞う習慣をもっていることから、こう呼ばれるようになった⁴⁾。

第二章。場面は役所からパリの屋根裏部屋へと移る。そこには、痩せた小さなお針子のアンジェールが住んでいて、朝から晩までミシンを踏んでいる。単調な生活を送るアンジェールだが、ある日彼女は、隣に住む女、すばらしい肉体をもち、奔放に生きているマダム・フェルナンドに出会い、外の世界を知っていく。

第三章。舞台は再び役所に戻る。お調子者のクロキニョルが遺産を相続し、裕福になった彼は、仲間の三人を豪華な食事に招待する。招待を断ったポーラを除き、クロキニョル、フェリシアン、クロードの三人は、郊外へと繰り出す。天気のいい日曜日、田園の中のレストランで彼らはたらふく食べ、心地よく酔い、すっかり上機嫌でパリに戻ってくる。そして彼らは、第二章で紹介されたアンジェールとマダム・フェルナンドという二人の女と知り合う。

第二部に入ると、まずクロキニョルとマダム・フェルナンドの関係が描かれる。マダム・フェルナンドの肉体を所有し、世界を征服したかのような得意の絶頂にいるクロキニョルと、自らの身体を磨きあげ、飾り立てることしか頭にないマダム・フェルナンド。クロキニョルはマダム・フェルナンドに衣類や宝石を買い与えることに夢中になる。

一方、第二部第二章では、クロードとアンジェールの物語が進行していく。内気な二人は少しずつ親しくなり、クロードは、アンジェールの部屋に毎日通うようになる。しかし二人に肉体関係はなく、クロードはアンジェールとの結婚を夢見ながらも、ただ話をし、家事を手伝い、彼女を散歩に連れ出すだけで満足している。クロードはアンジェールが今までの単調な生活に飽き足らなくなっていることに気付いていない。

そして第三章で悲劇が起きる。アンジェールは、クロキニョルに押し倒され、彼を受け入れてしまう。翌日、後悔したクロキニョルは、友であるクロードにそのことを告げ、謝る。しかし、クロードは絶望し、アンジェールに別れの電報を送る。そして、事の重大さにショックを受け、虚脱感に襲われたアンジェールは、屋根裏部屋でひっそりと自殺してしまう。

こうして、アンジェールは死に、小説は結びの章に入る。アンジェールの葬儀一切の費用をもち、葬式を済ませたクロキニョルは役所を去る。そして二年後、クロ

キニョルは突然役所に現れると、仲間に相変わらずの陽気な姿を見せ、自らの優雅な生活を語る。

しかし翌日、クロキニョルから手紙を受け取ったフェリシアンは、その日の夕刊で、クロキニョルがピストル自殺によって、命を絶ったことを知るのである。

2. 役人の「時間意識」

あらすじを概観しただけでは現れないが、この物語を支配しているのは「時」« le temps »、「時間」« l'heure »である。

では、擬人化される「時」が君臨する役所の情景から見ていこう。

C'est ainsi qu'étaient faits Paulat, Croquignole et Félicien, et il y avait encore dans le bureau un quatrième camarade qui s'appelait Claude Buy. Mais il n'y avait pas que des hommes, il y avait aussi le temps. (p.133)

ポーラ、クロキニョル、フェリシアン、クロードという四人の主要登場人物。「しかし、役所にいるのは人間ばかりではない。時もまたいるのだ」として、「時」が紹介される。つまり、「時」は、この物語の五番目の「登場人物」といっても良い存在なのだ。この「時」は以下のように描写される。

Le matin, le temps passait assez vite parce qu'il n'y avait qu'à se laisser porter par l'heure jusqu'à midi ; alors l'instant du déjeuner venait, avec la sortie, avec la descente dans la rue, et cela constituait presque une aventure.

Mais ensuite l'après-midi était là. Le temps faisait sentir sa présence. Il était deux heures. Soudain il n'arrivait plus rien, le temps s'arrêtait et s'en prenait à vous. (p.133)

「かなり速やかに過ぎる」午前が過ぎ、昼食となると、皆は外に出て、ひとときの気晴らしを楽しむ。そして、午後になる。すると、「時」はその存在を示し始める。「2時」。ぱたりと止まった「時」に対抗しようと、人間たちは、何度も手足を動かしたり、息を吐いてみたり、何か考え事をしてみたりする。その苦心惨憺ぶりは以下のように描写される。

On remuait un membre, on poussait un soupir, on remuait plusieurs fois un membre, on poussait plusieurs fois un soupir, et, sachant que les pensées aussi marquent le temps,

on se mettait à penser. On se disait : « Voilà. Une pensée dure bien une minute et il n'y a que soixante minutes dans une heure. Lorsque cette minute-ci aura passé, il me semble que les autres minutes n'auront pas de mal à venir. » (p.133)

こうして、あれこれ考え、歩き回り、窓外を眺め、さて、少しは「時間」を潰せたかと時計を見る。

Vous avez une belle montre dans votre poche, avec des aiguilles à secondes qui semblent rappeler au temps qu'il faut faire diligence. Doit-on dire que vous étiez étonné ? Non, car vous saviez déjà que vous n'aviez pas de chance. Cinq minutes seulement avaient passé ! (p.133)

この世界の「時間」を管理しているのは、一人一人のポケットに入れられた「懐中時計」« la montre »である。その「美しい懐中時計」には、「迅速に進むべきだということ、時に思い出させるような秒針」がついているのだが、実際の「時」は迅速には進まない。人間に「勝ち目はない」ことは分かりきったことだ。これほどまでしても、ようやく「5分」が過ぎただけなのである。こうしてまた、「午後の中」にどっぷりと浸からなくてはならない。

Vous vous plongiez alors dans l'après-midi tout entière, vous vous asseyiez sur votre chaise, et, soutenu, porté dans le grand Immobile, vous restiez là, avec une toute petite vie humaine et dont le temps se jouait. Tantôt vous bâilliez, tantôt vous écriviez une ligne, tantôt vous balanciez votre tête, parfois un objet tombait, dans un bruit sec et sans ondes, qui ne mourait même pas. Il n'y avait plus à combattre : l'Éternité se prenait à vous ! (p.134)

「不動」の「時」。「永遠」の「時」。人間を嘲笑うかのように動こうとしない「時」の中で、我々は、ただただ「取るに足らない人生」を抱いて、じっと座っていることしかできない。「〈永遠〉が君たちを襲うのだ！」という表現が、この「時」の重さ、途方もない広がりを表している。「永遠」の「時」に対峙する人間の一瞬の生。その空しさは、パスカルの有名な言葉とも共鳴し合う。

Car il est indubitable que le temps de cette vie n'est qu'un instant, que l'état de la

mort est éternel, de quelque nature qu'il puisse être, et qu'ainsi toutes nos actions et nos pensées doivent prendre des routes si différentes selon l'état de cette éternité, qu'il est impossible de faire une démarche avec sens et jugement qu'en la réglant par la vue de ce point qui doit être notre dernier objet.⁵⁾

真木悠介は、パスカルの抱いたこの恐怖を「近代的理性そのものを究極においてふちどる恐怖」であると述べているが、確かに、時間がすべてを消滅させ、自己の生も人類の生もいつか終わるのだという確信は、人間に「死の恐怖」と「生の虚無」を感じさせずにはおかない。そして、こうした感覚が不可避であるという前提のもと、多くの「近代的理性」はそれぞれの方法によって、この恐怖と格闘してきたのである⁶⁾。

これに対し、フィリップの言説に「死の恐怖」は見当たらない。「永遠」の「時」の前でいつか終わりを告げる人間の生を虚しく感じながらも、生の過酷さを熟知している作家は、死を救済ととらえるのだ。フィリップの描く登場人物たちが、病や孤独、無為といった、生を引き延ばすあらゆる要素からの逃避として、自殺を選ぶのはまさにそのためである。作家自身、愛する父親を病で亡くした際、以下のように述べている。

«Mieux vaut peut-être que le pauvre homme soit parti de cette façon, son rôle humain était accompli. Il ne pouvait plus attendre de l'existence que la déchéance progressive, de grandes souffrances peut-être. Au fond on pourrait presque dire qu'il a eu de la chance... »⁷⁾

死を、老衰していくばかりの未来を断ち切るものとして捉え、受難の前に亡くなった父親の運命を「運が良かった」と捉える息子の心情は、嘘偽りのないものであろう。作者のこうした死生観を反映した登場人物たちは、死後に待ち受けるだろう永遠の「時」に脅える前にまず、生のうちにある、永遠を思わせるような「時」に脅えなければならないのである。

では、さらに続く役所の「時」の描写を見ていこう。

Ah ! n'importe quoi, pourvu qu'il y eût un mouvement initial, qu'on se sentît remuer et que le temps marchât ! (p.134)

こうして、2ページをまるまる費やして、執拗に描かれる「時」の圧迫は、6時になるまで延々と続く。

Si bien que, longtemps plus tard, quand le temps, las enfin de vous avoir fait attendre, amenait six heures et vous délivrait du bureau, vous descendiez dans la rue, tout cassé par ses assauts et la tête sonore comme ces coquillages inhabités qui répètent à jamais le bruit des flots. (p. 135)

長い引用を連ねてきたが、これが役所に君臨する「時」の姿である。役所に勤める者は、この「不動」の「時」をもてあます。彼らにとって、「時間」とは、倦怠と憂鬱を引き出すものにほかならず、潰すためにあるものなのだ。そして、四番目の仲間であるクロードが、罪悪感を感じるものこそ、こうした「時間意識」にほかならない。彼のセリフを見てみよう。

Monsieur, il y a une parole : « Tu gagneras ton pain à la sueur de ton front. » Je crois fermement à la vérité de cette parole. Mon père et ma mère travaillaient à tour de bras et j'ai toujours trouvé que cela était juste. Moi, je m'endors, je me laisse vivre, je suis assis ici auprès de vous. Vous voyez, j'ai même le temps de parler philosophie. Alors, quoi ! Que faisons-nous de la malédiction du travail ? (p. 136)

「額に汗して、汝のパンを得よ」という言葉が体に沁み込んでいるクロード。彼は、両親から受け継いだ職人の厳格な「時間意識」と、「哲学を語る暇さえある」という役人の「時間意識」との狭間で、苦しんでいる。そして、クロードは、職人の「時間意識」をもつアンジェールと出会うことで、自分の居場所を見つけたように思い、生き生きと活動し始めるのである。

3. 職人の「時間意識」

では、二つ目の「時間意識」、屋根裏部屋で針仕事をするアンジェールの「時間意識」を見ていこう。

屋根裏部屋で一日中ミシンで縫い物をして過ごすアンジェールの朝は、次のように始まる。

C'est le matin, mon Dieu, on peut en profiter un peu et perdre trois minutes afin de

savoir ce qui se passe.

(p.143)

「3分くらいなら無為に過ごしてもよい」と考えられる「朝」のひとつ。この文章からすでに、役所の人間たちのもつ「時間意識」とは異なる「時間意識」が見て取れる。彼女の生活は、次のようなものだ。

Alors elle se consolait du travail et de la peine par l'application d'une sorte de silence. Elle utilisait une idée à elle, une remarque qu'un jour on lui avait faite, une certaine habitude et une certaine intelligence qu'elle avait du calicot ; et, dans le matin, dans le silence, sentait fonctionner son cerveau. La vie de la femme avait été déterminée, avait été définie : il y a la couture, il y a le linge, il y a la paix, il y a cette rêverie docile et si humble qu'elle accommode du travail des mains. Angèle avait accepté les termes de cette définition, et, toute pénétrée d'harmonie, vivait d'accord avec un grand principe jusque dans le fond de son cœur. (p.144)

アンジェールはお針子という手仕事に従事する、いわば職人である。それは頭を捻る仕事ではない。黙々と身体を動かし、日々こなしていく仕事であり、「ある種の習慣」と「ある種の知性」とによって、熟練していく仕事である。そして、こうした仕事は、秩序だった生活を要求するものであり、その秩序は、毎日「決まりきった」「時間」によって運ばれていかなければならないものである。ここから、屋根裏部屋の、アンジェールの「時間意識」が生み出される。

では、アンジェールの日を追ってみよう。

Le premier bruit du matin formait un appel auquel elle n'avait jamais appris à se soustraire. Un peu plus tard, il y avait le coup de midi pour un petit plat vite fait. Elle n'avait pas faim, mais midi aussi était un appel. Dès son premier jour, Angèle avait pris l'habitude de l'obéissance. (p.145)

朝の最初の物音が、「号令」となって、アンジェールは仕事にかかる。「最初の日からすでに、従う習慣を身に着けていた」という彼女には、この「号令」から逃れることなど夢想だにしない。こうして午前はあっという間に過ぎ、正午になる。空腹かどうかは関係ない。「正午もまたひとつの号令」である以上、それにしたがって、昼食を摂らなければならないのだ。こうして、アンジェールは「号令」に追われな

がら、一日を過ごす。

しかし、夕暮れ時になると、一日の疲労がたまってくる。そんなとき、アンジェールは、お針子であることに倦み疲れ、別の人間になりたいと思う。アンジェールは、そんな疲労感をごまかしながら、4時になるのを待つ。4時になると、スープを火にかける。そして、スープができあがるまでの3時間、再び仕事を続けるのである。

これがアンジェールの日だが、こうした身体を使う仕事の良さは、「時」に付け入る隙を与えないというところにある。役所の仕事のように、「時間を潰す」という発想が生まれにくいのだ。アンジェールは、朝の時間を「3分無為に過ごしてもいい」と考える。それは、7時まで針仕事に精を出さなければならないアンジェールの「時間意識」が生み出す考えである。そして、それは、5分を潰すために七転八倒する役人たちの「時間意識」の対局に位置する。

では、こうした異なる二つの世界において、それぞれの「時間意識」は、登場人物たちをどのような結末に導いていくのだろうか。死に向かう二人、アンジェールとクロキニョルのうち、まず最初に結末を迎えるアンジェールの運命から見ていこう。

4. アンジェールの場合

アンジェールの自殺は、クロードからの決別の手紙が引き金となって起こる。けれども、アンジェールはクロードを愛していたわけではない。ではなぜ、彼女は、クロードから別れを切り出されたからといって、死を選ばなければならなかったのだろうか。その答えを、クロードと出会ってからのアンジェールの行動の中に探してみたい。

毎日、アンジェールの部屋へとやってくるようになったクロード。彼は、縫い物に追われる彼女の負担を減らそうと、家事を手伝いはじめる。そのきっかけとなる場面を見てみよう。

— Oh ! on mangerait bien, puisqu'on est forcé de manger. Mais pendant qu'on mange on perd son temps. Il [= Claude] ne s'émut pas beaucoup, tout d'abord :

— Et quand vous avez perdu du temps, comment faites-vous ?

— Je le rattrape pendant la nuit.

(p.199)

アンジェールは忙しい。朝から晩までシャツを縫い、その間に食事の仕度をして、急いで食べるのだが、そうした食事の時間は、「時を失う」《on perd son temps》と
言い表される。その「失った時」は夜の間に取り戻す。つまり、夜も縫い物をしな
いと間に合わないほど、「時間」に追われているのだ。

そして、こうした生活こそ、「小さな町」に生きてきたクロードが、まっとうなも
のと感じる生活なのである。なんとか「時間」を潰そうと、日々、役所の「時」と
格闘しているクロードは、ここぞとばかり、アンジェールの「時間意識」を共有し
ようと奮闘する。そこで、彼は、食事の仕度を請け負うことを提案し、アンジェ
ールの「時間」をうかすことに喜びを感じる。玉子焼きやビフテキを作っては、「30
分かかった」《Ça fait une demi-heure.》、「45分で出来た！」《Il m'a fallu trois quarts
d'heure!》(p.200)などと、節約できた「時間」を嬉々として報告するクロード。だ
が、それだけでは飽き足らず、明日からは朝の7時半に来て、掃除をしようと言
い出す。そして、あきれんアンジェールに対し、クロードは「朝、ぼくはどこで時間
を使えばいいのか分からないんだ」《Le matin, je ne sais pas où passer mon temps.》(p.
201) と言うのである。足りない「時間」をどうにかしてうかそうとするアンジェ
ールと、ありあまる「時間」を何とかして潰そうとするクロード。正反対の「時間意
識」が、彼らの利害を一致させる。こうしてアンジェールの家事一切を引き受けた
クロードは次のように言う。

—Mademoiselle, une heure le matin pour le ménage, une heure le soir pour la
cuisine, ça fait deux heures.

—Oui, dit Angèle.

—Bien. La semaine comprend sept jours. Sept fois deux font quatorze. Je vous fais
économiser quatorze heures par semaine. (p.202)

こうして、クロードはアンジェールの「時間」を「節約」し、余暇の「時間」を捻
出することによって、日曜日に彼女を郊外に連れ出すことに成功する。そこで、ア
ンジェールはこれまで知らなかったのびやかで楽しい「時間」の過ごし方を知り、次
のように思う。

Hier à cette heure-ci, je tirais l'aiguille : tirer l'aiguille fait passer le temps.
Aujourd'hui, maintenant, je ne tire pas l'aiguille, et j'en ai si peu l'habitude que cela
me distrait. Ne pas tirer l'aiguille est une occupation. Angèle sentait encore qu'elle

n'était pas dans la chambre, qu'elle n'était pas assise sur une chaise et qu'une après-midi peut passer comme si les chemises n'existaient pas. C'était un nouveau système du monde. (p. 206)

「針を動かすことが、時間を過ごすこと」であると認識していたアンジェールは、自分がシャツを縫っていないこと、部屋の中で椅子に座っていないことに驚く。郊外には、野原が、花々や小鳥が、風や空が、自由があった。そこでは、「時間」も朝と午後と晩に区切られることなく、ひとりでに流れていく。

Les heures coulaient d'elles-mêmes, sans laisser aucune trace dans l'azur du ciel, et le repos existait matériellement, dans un bras que l'on glissait sous sa tête, dans une jambe que l'on étendait sous sa jupe, dans tout un corps que le souvenir de la machine à coudre quittait insensiblement pour faire place à un rythme nouveau. (p.206)

アンジェールは、新しい世界を知り、この日を境に、彼女の視点は逆転する。

Ce sont les machines à coudre qui sont mortes et les cimetières qui sont vivants. (p.207)

これまで生活のすべてだったミシンが「死者」に、これまでミシンに遮られて見ることもできなかった窓外の墓地が「生者」となる。やがて、夕食後に仕事をするとはなくなり、その代わり散歩に出かけるようになる。クロードとともに散歩をするが、「もしクロードが行きたくなければ、一人ででも行っただろう」。そのうちに単なる散歩では飽き足らなくなり、カフェへ、さらにカフェ・コンセールへと、次々にパリの快樂を求めていく。そして、カフェ・コンセールを出る頃には、彼女はもはや、もとのアンジェールではなくなっていたのである。

Et lorsqu'elle en sortit, la vie n'était pas ce qu'elle était auparavant : la vie contenait un feu subtil que, seuls, les plaisirs de Paris savent allumer. Elle ne goûtait plus l'air de sa fenêtre, le cimetière Montparnasse lui-même était désolé. (p.208)

こうして、郊外の自然を知り、パリの快樂を知り、屋根裏部屋に嫌気がさすようになったアンジェールに、さらなる誘惑が訪れる。マダム・フェルナンドの留守中に

やってきたクロキニョルである。アンジェールは、そんなクロキニョルを受け入れてしまう。クロードとの関係を知っているクロキニョルは一応、「だけど、クロードは？」と訊ねるのだが、アンジェールは次のように言う。

—Oh ! il est gentil. Il m'aide à travailler : seulement, voilà : auprès de lui on se rappelle toujours qu'il faut travailler ! (p.227)

クロードは、アンジェールに新たな「時間」の過ごし方を教えた。しかし、そんなクロードを、アンジェールは、幸せな日曜日を共に過ごす相手としてではなく、そのための「時間」を捻り出すために、仕事を手伝ってくれる相手と捉えずにはられない。そして、自分を馬車に乗せ、劇場に連れて行ってくれるというクロキニョルに身をまかせてしまうのである。

それでは、この事件がどのような結末を見るのだろうか。この事件の明くる日から、彼女が死に至るまでの過程を追ってみよう。

明くる日、クロキニョルの口から事実を打ち明けられたクロードは、ショックのあまり、もはやアンジェールとは会わないことを決意する。しかし、そうとは知らないアンジェールは、いつものように部屋でクロードを待っている。そして、その日の晩、アンジェールの「奇妙な体験」 « une singulière aventure » が、以下のように描かれていく。

Six heures vint comme six heures vient quand on a eu de la patience, et au bout d'un temps vint six heures et quart.

Six heures et quart était le précurseur de six heures vingt. Six heures vingt tournait la clé dans la serrure, et, lorsqu'il entra :

—Quelle heure est-il ? demandait-elle.

—Pas tout à fait six heures et demie ! (p.227)

6時になってもクロードは来ない。6時15分になっても20分になっても来ない。「時間」は擬人化され、「何時？」と訊ねるアンジェールに「もうすぐ6時半だ」と答える。そして、アンジェールの心理状態が、「時間」の描写に転化され、語られていく。その晩、クロードを待つアンジェールが寝るまでの「時間」の経過を追ってみたい。

Sept heures vint avec toutes ses minutes, elle les laissait aller à leur guise, et quand

ce fut la dernière, les chemises, l'aiguille, le travail, avec lequel il vaut mieux prendre un peu d'avance...

— Tant mieux, il n'est que sept heures ! Je vais pouvoir finir ce que j'ai commencé.

Elle ne remuait pas, de crainte de déranger quelque chose. A sept heures et demie, pourtant, elle reçut un rappel de la vie quotidienne :

— Tiens, c'est vrai, je n'ai pas encore dîné.

Après huit heures moins le quart, elle attendit huit heures pour se répondre à elle-même :

— Ma fois, tant pis, je n'ai pas faim !

Elle se coucha à neuf heures, comme la veille, pour que ses habitudes fussent ses habitudes et pour se prouver que rien d'extraordinaire n'était arrivé : « Demain sera demain, mais aujourd'hui il est neuf heures, tant pis pour ceux qui sont en retard ! Et puis le dîner n'est pas mon affaire. » (p.228)

なかなか進まない「時間」が、まるでクモの巣のようにアンジェールを絡みとっていく。クロードが来ないこと。大変な過ちを犯してしまったのではないかという不安。アンジェールの心理状態は一切語られていないにもかかわらず、我々は、「時間」の描写から、それらを感じ取ることができる。

こうして、アンジェールは眠りにつく。クロードがいつ来てもよいように、鍵を開けたまま、灯りをつけたまま、眠るアンジェール。そして、翌日。髪をとかしても、鏡を見ても、「すべては起きてしまった」ことに変わりはない。アンジェールは部屋を歩き回り、窓を開け、ようやく仕事にとりかかる。だが、シャツを縫い続けることはできず、街を歩いたり、パンを買ったり、普段しないことをして一日を過ごす。一日中、「時間」を潰そうとあがくアンジェール。しかし、クロードは来ない。4時。アンジェールは、意を決して、クロードの職場を訪ねる。5時に着き、出口付近で彼を待つ。そして、6時がやってくる。6時きっかりに出てくるクロード。しかし、アンジェールに気付くと顔をそむけ、通りを渡って行ってしまふ。アンジェールは愕然とするが、それでも希望を捨てず、クロードに電報を打ち、「もう私に会いたくないのですか？」と訊ねる。10時半。郵便局員がドアを叩き、クロードからの返信をアンジェールに手渡す。「ごめんなさい。アンジェール。君に限って、あんなことが起こるなんて、思いも寄らなかったのです。もう、君には会いに行きません」。(p.231) この返事を受け取ったアンジェールは、「長い間、部屋の隅を見つめていた」。

だが、一週間分の仕事を雇い主に引き渡すため、彼女は土曜日まで待った。シャツを渡し、義務を果たし終えたアンジェールは、家に帰りつき、ぐったりと疲れて椅子に座る。最後にあらゆる楽しいことを思い出し、パリの街中に出て行こうかとも考える。だが、そんな彼女をとらえるのは、次のような意識である。

Elle aurait bien attendu la journée du lendemain, mais n'ayant pas de travail, elle n'aurait pas su comment employer son temps.

—Et puis, demain, ce serait la même chose. (p.234)

アンジェールは、結局、「仕事なしで、どうやって時間を使ったらよいのか分からない」ことから、「明日だって、同じことの繰り返しだわ」というあきらめの境地に至る。こうして、アンジェールは閉め切った部屋で木炭に火をつけると、ベッドに横たわって、死んでしまうのである。

それでは、なぜ、アンジェールは死を選ばなければならなかったのだろうか。

一日中、針仕事をし、「針を動かすことが、時間を過ごすこと」とであると認識していたアンジェールの「時間意識」は、クロードによって郊外に連れ出された日を境に一変する。「仕事をしなくても過ごせる日がある」ということを知った彼女は、ミシンを脇にどけ、散歩に出かけるようになり、カフェ・コンセールに歌を聞きに行くようになる。クロードは単なるきっかけにすぎなかったが、クロキニョルとの過ちによって、クロードが去ってみると、クロードこそ、彼女に新たな「時間意識」を植え付け、新たな生活に導いていた原動力だったことに気が付く。そして、その原動力がなくなったことで、アンジェールの「時間意識」は、行き場を失ってしまう。最後の日に浮上するのは、「仕事なしで、どうやって時間を使ったらよいのか分からない」という以前の「時間意識」である。郊外の「時間」を、「仕事をしなくても過ごせる日」を知ってしまった今、ミシンは生気を失い、屋根裏部屋は陰気な場所となってしまった。もはや、もとの生活には戻れず、そこから、「明日だって、同じことの繰り返しだわ」という絶望感が湧き上がる。

新たな「時間意識」を知り、もとの「時間意識」を取り戻せなくなってしまったアンジェールに、居場所はない。こうして、居場所のなくなったアンジェールは、自殺するしかなくなってしまふのである。

5. クロキニョルの場合

では、役所で生きていたクロキニョルはどうだろうか。役所で共有されていた「時間意識」が、クロキニョルの運命をどのように動かしていくのかを、次に見ていきたい。

莫大な遺産を相続し、働かずして食べていける身分となったクロキニョルであるが、それでもしばらく役所で働いていた。彼は朝、役所にやってくると、まず引き出しに入っているものをすべて出して並べ、その後、じっと座っている。だが、それも、たった「3分」しかもたない。

Il s'asseyait, on vit même des jours où pendant trois minutes il restait assis. Mais bientôt il rejetait les trois minutes à la fois. Elles l'étouffaient. (p.209)

早くもやることのなくなったクロキニョルは、一日中、壁に頭を打ち付けたり、部屋から部屋と歩き回ったり、両足を踏み鳴らしたりするほかなくなる。そのうち、給仕にサンドウィッチとビールを持ってこさせ、周りの同僚と飲み食いする。そして、それも終わると、とうとうやることがなくなり、外へ飛び出して行ってしまう。こうして、向かった先が、マダム・フェルナンドのところである。そして、不在の彼女の代わりにクロキニョルを迎えたのが、アンジェールであった。

クロキニョルは、自殺したアンジェールの葬儀費用を出すと、役所を後にする。その後、街で何度か、彼の姿を見かけたという噂が出るものの、そうした噂もやがて途絶える。そして、二年後のある午後のことである。

Une après-midi d'été, deux ans plus tard, le temps était ce qu'est le temps : un vieillard qui se traîne, qui achève de vivre, deux ans l'avaient encore vieilli. Quelqu'un même, un jour, fut amené à dire :

— Je crois bien que le temps a des rhumatismes.

Il arrivait le matin, tout lourd, geignard, branlant, choisissait un coin sombre, vivait peut-être, mais restait immobile jusqu'au soir. On ne disait rien. Le temps est un peu de votre famille, il fallait bien qu'on le supportât.

Depuis deux ans on l'avait supporté sans un mot, sans une plainte. On ne faisait pas de bruit, on ne quittait pas souvent sa chaise, on ne marchait pas non plus. Alors personne n'avait eu l'occasion de lui dire :

— Fais-moi de la place ! (p. 241)

二年後も、「時」はやはり「時」のままであるが、それは、「のろのろと歩く、生きることに疲れきった老人」の姿で現われる。二年の間にさらに年老いた「時」だが、二年間の付き合いで、皆「時」を大目に見ることを学んだようだ。いまや「リュウマチを患った」老いぼれの「時」は、「家族」の一員のようなものであって、我慢してやらなければならない存在ととらえられている。一向に動かない「時」に不平を言うこともない。つまり、皆、役所の「時」に慣れたのだ。そんな中、クロキニョルがやってくる。彼の訪れは、次のように描かれる。

Or on ne sait jamais, avec le temps. Une après-midi d'été, il arriva ceci : tout fut bouleversé dans le bureau. Le temps s'agita, il y eut un mouvement excessif, la porte fut ouverte, un événement fit son entrée. Chacun l'accueillit comme il arriva.

— Croquignole ! (p. 242)

「時」が動き、二年ぶりにクロキニョルが姿を現すのである。そして、役所の「時」の中にどっぷりと浸かっている同僚たちに次のように言う。

— Alors c'est vrai, mes vieux ! Alors ça existait vraiment ! Alors c'était fait comme ça ! Alors c'est ici que vous avez vécu ! (p.243)

二年間を役所の「外」で過ごしたクロキニョルは、この役所に自分もいたのだとは、どうしても思えなくなっている。

— Alors, tu arrives ici le matin à neuf heures, tu t'assois, tu vis là, tu t'en vas déjeuner et puis tu reviens et tu restes jusqu'à six heures.

L'autre répliquait :

— Allons, mon vieux Croquignole, il ne faut pas te moquer de nous, tu as fait la même chose !

Il répondit :

— Franchement, je ne m'en souviens plus. (p.243)

そして、役所の生活が理解できないことを示すとともに、自分の優雅な生活をひけらかす。退屈しようとも、晴天であろうとも、外出の許されない役所の生活。クロキニョルにとって、そこに甘んじることは、「時間」を、そして「人生」を無為に過

ごすことにほかならない。しかし、彼の言う「昼間だって、人間は生きているのだ」ということがもっともであることくらい、誰だって承知しているのだ。彼のように、ブルターニュで三ヶ月を過ごし、一日中、海辺でのんびりできたらどんなによいだろう。だが、莫大な財産でもない限り、そうした生活は望めない。同僚は次のように言う。

— Tu parles à ton aise. Bien sûr, si nous avons des rentes... Mais que veux-tu, mon ami, il faut bien vivre. (p.244)

この「生きなければならない」« il faut bien vivre » という反論しようもない言葉を受け、クロキニョルは次のように言う。

— J'y ai beaucoup réfléchi. Eh bien, ça n'est pas sûr ! (p.244)

こうして、「そのことについてよくよく考えてみたけれど、そうとも限らない」という結論に達したクロキニョル。それは、「果たして、人間は、どんな人生でも生きなければならないのか」という根源的な問いを含んでいる。毎日 9 時から 6 時まで、「不動」の「時」の中で、「取るに足らない人生」を抱いて、じっと座っていなければならない、そんな人生でも生きなければならないのだろうか。

翌朝、フェリシアンは次のように始まるクロキニョルからの手紙を受け取る。

J'ai prononcé cette après-midi un mot très bien et que vous n'avez pas assez remarqué. Vous étiez au bureau. Il y fait sombre. L'un de vous m'a dit : « Il faut bien vivre. » J'ai répondu : « Ça n'est pas sûr ! » Non, mon ami, ça n'est pas sûr. Et j'en fournis la preuve ! (p.244)

そして、遺産を使い果たしたこと、マダム・フェルナンドに捨てられたこと、6 時まで皆とともにいられるだろうと思っていたが、15 分も我慢できなかったことなどが綴られていく。

Je croyais pouvoir rester avec vous jusqu'à six heures. Je n'ai pas pu ! Au bout d'un quart d'heure, j'avais mal à la tête. Vous m'avez dit :

— *Il faut bien vivre !*

J'ai répondu :

— *Ça n'est pas sûr !*

Tous les jours, au bout d'un quart d'heure, j'aurais mal à la tête. Tu n'as pas connu le zèbre du Jardin des Plantes ? Le zèbre lui-même a du mal à vivre au Jardin des Plantes. (pp.245-246)

「毎日、15分もしたら、頭が痛くなるだろう」と言うクロキニョルが、役所に戻ることはもう決してない。フェリシアンがこの手紙を受け取ったその日、「アリステュード・ビュフィエール（クロキニョル）」がピストル自殺を遂げたという記事が、夕刊に報じられるのである。

役所にいられなくなり、「外」へ出て行ったクロキニョル。では、彼を役所から追い出したものとは何だろうか。それは、五番目の「登場人物」として存在感を示す役所の「時」だったのではないだろうか。じっと動かない「時」。5分つぶすのに七転八倒する「午後」。そうした「時」が、彼を「外」へと追い出したのである。

それでは、役所から追い出されたクロキニョルは、なぜ、自殺を選ばなければならなかったのか。

ここで、我々は、作者の言葉を見てみることにしよう。

以下に挙げるのは、セバスチャン・ヴォワロルという評論家の批評に答えて、作者フィリップが述べている言葉である。

Mais ce qui, pour moi, a donné tant de valeur à votre article, c'est que vous touchez à une des questions que je me pose encore aujourd'hui.

Dans mon esprit, Croquignole se tue parce qu'il ne peut plus retourner au bureau, parce qu'il a exagéré son amour d'une vie violente et sensuelle, parce qu'il lui faut l'air, l'espace, le feu, parce qu'il n'est pas capable de devenir le zèbre du jardin des Plantes.⁸⁾

フィリップは、クロキニョルが自殺した理由として、「役所に戻れなくなってしまったから」であり、「激しい享樂的な生活にのめり込みすぎたから」であり、「空気、空間、情熱が必要であったから」であり、「動物園の縞馬にはなれなかったから」であると述べている。

ここで言われている「動物園の縞馬」« le zèbre du jardin des Plantes »とは一体何だろうか。クロキニョルの遺書となった手紙にも、「動物園の縞馬も、動物園で生きていくのは辛いのだ」(p.246) という一文があるが、「動物園の縞馬」とは、すなわち役所勤めをしていた頃のクロキニョルを指す。狭い動物園の一隅に閉じ込められた縞馬。思い切り空気を吸い、空間を駆け巡り、本能のおもむくままに生きたいという欲望を押し殺し、おとなしくしている縞馬とは、「すべてを食いつくす男」である「アリステュード・ビュフィエール」の欲望を内に秘め、役所勤めをしていたクロキニョルにほかならない。役所の「時」を受け入れ、ありあまる「時間」を潰して毎日を過ごしていたクロキニョルだが、遺産を相続したことによって、たががはずれる。彼は、「激しい享乐的な生活」に身をゆだね、「空気、空間、情熱」を求めて、「外」へ飛び出していくのだ。本能のおもむくままに生活できる身分となった彼にとって、役所の生活など馬鹿馬鹿しく思える。そんな中、彼の軽率な行動が一人の女の死を引き起こす。それをきっかけに、彼は役所からいなくなるのだが、しかし、それは単なるきっかけにすぎない。彼は完全に役所を去り、贅沢三昧の生活を送ったのだが、やがて遺産も底をつく。彼は、再度役所に戻って働くことを余儀なくされるが、15分ももたない。役所の「時」をなんとか飼いならしている同僚たちとは違い、二年間も役所からかけ離れた「時間意識」を享受してきたクロキニョルは、もはや役所の「時」に付き合うことができないのである。そこから、「果たして、生きなければならないのか」という問いが湧き上がる。

一度「外」に出て行ったクロキニョルが、もとの「時間意識」を再度身に着けることはできない。こうして、居場所のなくなったクロキニョルは、自殺するしかなくなってしまうのである。

6. 結び

フィリップの愛読者であったルカーチは、次のように述べた。

Un éternel retour. Tel est le destin typique des héros de Philippe : ils veulent partir et il semble qu'ils vont réussir, quand, d'un coup, quelque chose survient, et ils s'en retournent. Cette chose est-elle extérieure ? Je ne le crois pas. Je crois plutôt qu'ils veulent renoncer, bien qu'ils ne prennent pas conscience du but, ni des raisons de ce renoncement ; quelque chose en eux aime la pauvreté et son oppression— comme l'amoureux Jean Bousset (héros de *Père Perdrix* et *Marie Donadieu*, noté par nous)aimait sa solitude— , et l'obstacle extérieur est transformé intérieurement en

quelque chose d'insurmontable.⁹⁾

ルカーチが見抜いたように、フィリップの登場人物たちが自らの抑圧された生活から出ていこうとして出ていけないのは、彼らが「断念したがっている」からなのだ。そして、彼らの内部に生まれる「克服されえぬもの」が、『クロキニョル』では「時間意識」として立ち現われてくるのである。

ある「時間意識」を捨て、「外」へ飛び出していくこと。それは大きな誘惑だろう。しかし、一度飛び出したら最後、もはや「内」に戻ることはできない。生活を規定する「時間意識」とは、居場所や仕事によって、各人の身に染み付いていくものであって、自由に脱いだり着たりできるようなものではない。一朝一夕に培われるものではなく、人間の存在を決定づけてしまうほど強固なものなのである。それゆえに、一度それを否定した者は、二度ともとの場所に戻ることはない。こうして、この世のどこにも居場所のなくなった人間は、死を選ばざるを得なくなるのである。

「小役人」の悲哀を描いた数ある小説にあって、その悲哀の軸を「時間意識」に置くという独創性を見せる『クロキニョル』は、新たな「人間的時間」の切り取り方を提示したという意味においても、非常に興味深い小説であると言えよう。そして、ブルジョワ文学の表明してきた言説から離れ、「永遠の時」を生のただなかに見つめ、恐怖するという視座を呈示したことは、今日的な問題を先取りしていると考えられるのである。

注

Charles-Louis Philippe, *Croquignole* dans *Œuvres complètes tome III*, édition présentée et établie par David Roe, Impomée, 1986. からの引用は直接本文中にページ数を記す。下線は引用者による。

- 1) Cf. Jean-Paul Sartre, *Qu'est-ce que la littérature ?*, Gallimard, 1948.
- 2) Cf. 東海麻衣子, 『シャルル=ルイ・フィリップにおける「時」・「時間」・「時間意識」の考察』, 広島大学博士論文, 2009.
- 3) « Octave Mirbeau, l'un des dix membres du jury, avait eu beau se battre en 1903, puis en 1904 (pour *Marie Donadieu* noté par nous) et encore en 1906, il n'avait pas réussi à faire reconnaître les mérites de Philippe. Après la mort de celui-ci, il écrira, dans une lettre à Francis Jourdin : « C'est maintenant que je comprends avec plus de force, ce que nous perdons en ce pauvre petit Philippe ! Si vous saviez quelle colère j'éprouve contre cette académie stupide, plate et méchante — contre... surtout — qui n'a pas su donner à ce grand artiste un peu de bonheur, un peu de tranquillité ; je ne dis pas un peu de fierté. » in Bruno Vercier, *La Mauvaise Fortune*, 2011, Gallimard, pp.168-169.
- 4) 主人公のあだ名 « Croquignole » は彼が娼婦たちに配る「お菓子」の名前に由来するものだが、これがこの作品のタイトルともされるのは、« Cronos (ギリシア神話の時の神) » と « guignol (指人形) » をかすかに暗示するからかもしれない。
- 5) Blaise Pascal, *Pensées*, texte établi par Louis Lafuma, Seuil, 1962, p.188.
- 6) Cf. 真木悠介, 『時間の比較社会学』, 岩波書店, 1982.
- 7) Bruno Vercier, *op.cit.*, p.158.
- 8) David Roe, « Pages d'autrefois sur Croquignole » in *Bulletin des Amis de Charles-Louis Philippe*, n°52, 1996, p.38.
- 9) Georges Lukács, *Aspiration et forme : Charles-Louis Philippe dans L'Âme et les Formes*, traduit de l'allemand par Guy Haarscher, Gallimard, 1974, p.164.

À propos du temps dans *Croquignole* de Charles-Louis Philippe

Maiko TOKAI

Discutant sur le temps dans les textes littéraires, on pourrait en général prendre deux directions. D'un côté, celle du temps dans la narration qui entraîne l'intrigue d'une fiction, ce qui nous rappellerait l'œuvre de Proust ou les études de Paul Ricœur. Et d'un autre côté, celle du *temps humain* énoncé dans le texte de chaque écrivain, analysé entre autres par Georges Poulet. C'est là une recherche du temps intérieur et philosophique des écrivains.

Suivant la deuxième direction, cet article se propose de considérer le temps dans un texte de Charles-Louis Philippe (1874-1909), afin de mettre en lumière une originalité de l'écrivain à travers sa vision du temps dans son roman.

Parmi les nombreux romans sur les « bureaucrates », *Croquignole* est une œuvre originale qui attribue le rôle principal au temps. Deux personnages, lassés du temps quotidien le plus souvent monotone, sortent de leur cadre pour chercher un autre temps libre et animé. Mais ce n'est qu'une illusion. Comme le temps s'approprie indiciblement les domaines où les hommes évoluent, on ne peut le remplacer librement. Une fois détaché de son temps, l'homme est condamné à se mettre en dehors du monde.

Opposée à la crainte de Pascal, l'éternité pour Philippe existe dans la vie, et la mort est définie comme une fuite par le temps. Pour cela, le temps humain se présente plus sévère pour les vivants. En supposant le temps éternel dans la vie et le suicide comme une solution inévitable, Philippe souligne l'importance de vivre le temps réel imparti à chacun.

Mais, cette vision du temps ne viendrait-elle pas de la vie personnelle de l'écrivain, « un précurseur dupopulisme » qui vit les divers écoulements du temps ? Si, comme nous le pensons, tel était le cas, il serait alors possible de considérer sous un nouvel angle l'apport du populisme à la littérature française.